

個人の思い出と理想を用いた個人の理想都市像の明確化に関する研究

佐藤 玲¹・金 利昭²

¹非会員 独立行政法人都市再生機構 岩手震災復興支援本部

(〒020-0021 岩手県盛岡市中央通1-7-25 朝日生命盛岡中央通ビル8F)

E-mail:r-sato@ur-net.go.jp

²正会員 茨城大学 工学部都市システム工学科 (〒316-8511 茨城県日立市中成沢町4-12-1)

E-mail:toshiaki.kin.prof@vc.ibaraki.ac.jp

日本社会の課題や要請に応える都市の大改造を実行するためには、将来計画が明確に描かれ共有されなければならない。そしてその前提は、個人が自身の将来の都市像・生活者像を強く明確に描けていることであろう。しかしその保証は全くないと思われる。本研究の目的は、過去からのアプローチである「思い出」から本源的ニーズを把握し、未来からのアプローチである「理想」から将来ニーズを把握し、この2つを統合して、自身の理想都市像をはっきり描出できない個人が、自身の将来の都市像・生活者像を描出する手法を開発することである。結果、「過去の思い出」、「過去の理想」を経て「未来の理想」や「未来の思い出」を考えてもらうというプロセスが重要であると被検者自身も感じており、調査から得られた意見の変遷からも有用性を示した。

Key Words : *memory, ideal, city image, life vision, questionnaire survey, workshop*

1. 研究の背景

今日、日本社会は大きな変革期にある。急激に進展する人口減少や高齢社会への適応、低炭素社会への移行、国際化、AI、IoTへの対処等の社会の課題や要請に応える都市の大改造を実行するためには、この大改造を支える強力な都市計画の理念・目標が不可欠であり、将来計画が明確に描かれ共有されなければならない。そしてその前提は、個人が自身の将来の都市像・生活者像を強く明確に描けていることであろう。

自治体の都市計画マスタープラン策定においては、住民の意向を反映させるための住民意識調査が実施される。この時に実施される住民意識調査は通常、「現在住んでいる都市の状況にどれだけ満足しているか」、「都市における様々な要素が自身のまちづくりにとってどれだけ重要か」、「現在住んでいる都市の良いところは何処か」、「逆に足りないものは何か」など単純な質問項目で構成されている。ここでの問題は、従来型ニーズ調査手法で個人の表面的でない回答を導出できているかである。このような問題に対処するために、近年ではWS（ワークショップ）が多用されている¹⁾。しかし福田ら（2016）²⁾が指摘しているように、アンケート調査やグ

ループインタビュー調査（WS）においても個人の本音を抽出するには限界がある。さらに自身の理想像や将来像を深く考えたことがない人や、ニーズを上手く言葉にできない人に対してはほとんど対処できていないのが現状である。より根本的な問題は、これまでの住民ニーズの把握手法や目標設定手法は現実の制約条件に強く拘束されるために、本源的ニーズと新技術を含めた将来ニーズを捉えることが困難な点であると考えられる。

2. 本研究の位置づけと目的

これまで住民ニーズを直接的に捉えるための手法は数多く提案³⁾されてきたが、これらの多くは身近で短期的な地区レベルまでの計画が対象であり長期的広域的課題に適するものではない。榎本ら（2018）⁴⁾は地域の街づくり計画を作成する手法を検証し、ある地域の過去の履歴や住民から導出される将来の計画を具体的なイメージとして示した。しかしこの手法は自治体レベルの将来像の描出が主な目的であり、個人レベルの本源的ニーズを踏まえた将来像の描出を目的としたものではない。後藤ら（1996）⁵⁾は「まちづくり人生ゲーム」や「まちづく

「オーラル・ヒストリー」という新しい手法を提案しているが、現実の様々な制約条件下での意識であるために本源的ニーズは捉えにくい。本源的ニーズに関しては移動空間や自然、住宅、遊び空間、環境教育などに関する研究⁹⁾があるが、対象がそれぞれ独立した空間に限定されている。一方、原風景・心象風景・思い出・理想に関する研究⁹⁾では文学や心理学、建築・都市計画等の様々な分野で研究蓄積があるが、生活環境に関する具体的な知見には結びついていない。そこで社会の変化に対応した都市の将来像や理想像を考えるためには、個人が自身のニーズを明確化できる手法が必要であるとする。

本研究の目的は、過去からのアプローチである「思い出」から人間成長という制約から来る本源的ニーズを把握し、未来からのアプローチである「理想」から現実生活の制約を超える将来ニーズを把握し、この2つを統合して個人が自身の将来の都市像・生活者像を描出する手法を開発することである。具体的な目的は以下3点である。

- ① 自身の理想都市像をはっきり描出できない個人が、自身の思い出と理想を用いて、明確・具体的な理想都市像を持てる新しい手法を開発する。
- ② 従来の手法との比較を行い、開発した新しい手法の有用性を示す。
- ③ 開発した手法により、従来手法では抽出されない潜在ニーズを示す。

3. 研究の枠組みと思い出・理想調査手法の開発

(1) 個人の思い出と理想を活用する考え方

個人の潜在的・本源的なニーズを抽出するため、個人の思い出と理想を活用した手法を開発する。思い出は誰もが持っているもので、振り返る際には様々な都市環境、都市の要素が関わっている。しかし将来ニーズを描出するという目的にとっては、思い出には過去の実体験という制約がある。一方、理想は誰もが持っているとは限らないが、自由な発想で考えることができるので制約がからない。しかし理想の捉え方は人様々であり、単なる夢物語に終わる非現実的になる危険性がある。そこで、この思い出と理想を組み合わせることで、制約にとらわれずかつ潜在的・本源的なニーズを抽出することができる。さらに、思い出と理想からより潜在的・本源的なニーズを抽出するため、過去と未来という時間軸別で調査項目を作成し、「過去の思い出」、「過去の理想」、「未来の理想」、「未来の思い出」という4つの大きな設問を設定した(図-1)。以下にその内容と狙いを説明する。

- ① 「過去の思い出」に関しては、回答者が思い出した

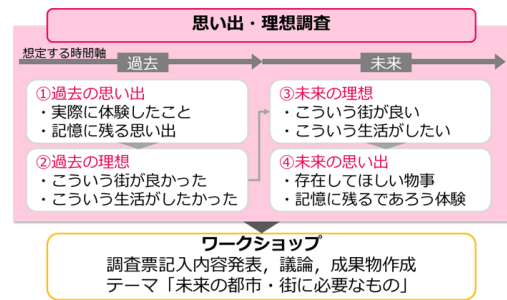


図-1 開発する手法の概念図

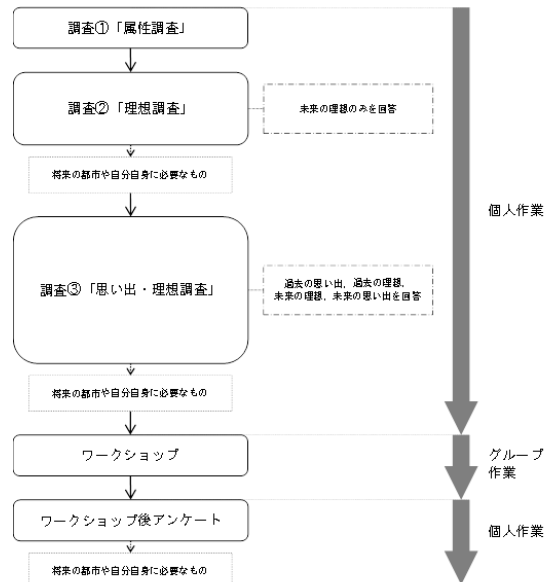


図-2 研究の枠組み

過去の思い出を記述してもらい、印象に残っていれば良い思い出でも悪い思い出でもよい。この項目は、これからの設問で将来の都市やライフスタイルについて考えやすくするための導入部として考えた。

② 「過去の理想」に関しては、「こういう街であればよかった」、「こういう思い出があれば現在の人生も変わっていたかもしれない」というような、過去の時点での理想を記述してもらい、過去の条件として、技術の進歩の程度は、回答者の思う過去の時点に見合った程度という条件で考えてもらい、あくまで理想を考えてもらうので、はっきりしたニーズが出てくる可能性が高い。

③ 「未来の理想」に関しては、『住む街』と『ライフスタイル』について、未来の理想を記述してもらい、この項目は、理想調査と思い出・理想調査の両方に設定した。従来型の手法にある設問に近く、現在、一般的な都市ニーズとして取り上げられる事柄も多く出てくることと予想されるが、思い出・理想調査では、過去の思い出や過去の理想を通すことで、従来型の調査のみでは出てこなかったニーズや、個人単位でのニーズの変化が出てくることと予想される。

- ④ 「未来の思い出」に関しては、未来の時点で「こう

いう物事があれば自分の生活は豊かになるだろう」, 「こういう経験をすれば自分の人生は幸せになるだろう」と思える事柄を記述してもらおう。設問に明記はしていないが、「過去の思い出」, 「過去の理想」, 「未来の理想」に通じた記述になることが予想される。設定についてのみ制約があるが, 過去の思い出と比較すれば制約条件は非常に少ない。未来で強く記憶に残ると思われる事柄を記述してもらおうことで, その内容から, 最新技術や真新しい環境にとらわれない潜在的なニーズが抽出できると考えた。

⑤ 未来の条件として, 数年から数十年後の未来の世界を想定してもらい, 現在の技術の延長で将来的に実現できる可能性があるものは存在しても良いものとし, タイムマシンや魔法のドアのような, 時間, 空間を超越するものは未来でも存在しないものとして設定した。

⑥ 「過去の思い出」, 「過去の理想」, 「未来の理想」, 「未来の思い出」の中で, 一般的に記述しやすいと考えられるのは「過去の思い出」と「未来の理想」であるが, 記述しにくいと考えられる「過去の理想」と「未来の思い出」の内, 「未来の思い出」部分にニーズが集約されると考えられる。特に潜在的なニーズはこの部分に集約されると考えられる。

(2) 研究の枠組み

分析のための調査は, ①属性調査, ②理想調査, ③思い出・理想調査, ④WS, ⑤WS後アンケートから構成され, この順に実施する(図-2)。ここで, 開発した新しい調査手法と従来手法との比較・検証のために, ②理想調査を従来型の都市ニーズ調査手法に該当するものとして実施することとした。また被験者の意識から調査手法の有効性を把握するために⑤WS後アンケートを実施する。

(3) 調査票の内容

a) 調査票の構成

被験者には調査票を記入する際, 理想調査の回答後に思い出・理想調査を回答するように指示した。これは思い出・理想調査を先に回答してしまうことによって過去が思い出された状態で理想調査が回答されることを防ぐためである。回答方式について, ①属性調査は選択式, ②理想調査と③思い出・理想調査は記述式とした(表-1)。表-1に示したように, ②理想調査では「未来の理想」について, ③思い出・理想調査の中では「過去の思い出」, 「過去の理想」, 「未来の理想」, 「未来の思い出」について記述してもらおうが, それぞれの設問の中で, きっかけを与えるために, さらに4つのテーマごとに回答してもらった。4つのテーマとは表-2に示すものである。回答時間は, ②理想調査と③思い出・理想調査

表-1 調査票の構成

調査	質問項目
属性調査	個人属性
理想調査	未来の理想
思い出・理想調査	1. 過去の思い出 2. 過去の理想 3. 未来の理想 4. 未来の思い出

表-2 4つのテーマ

テーマ1	テーマ2
自然・動物・植物・風景・景色	文化・思想・作品
テーマ3	テーマ4
生活・暮らし・習慣	移動

の分量が多く記述式の調査票であることから, 個人差が大きいと考え, 全ての調査票を合わせた回答時間として4~8時間程度を想定した。

b) 理想調査の設問

理想調査では「未来の理想」を回答してもらおう。設定は3.(1)節に示す通りで, 未来における回答者自身の住む街についての理想と, 回答者自身のライフスタイルについての理想を, エピソードの個数や分量は自由として表-2に示す4つのテーマごとに回答してもらった。住む街とライフスタイルはリンクさせて考えるように表記し, 数年から数十年後の未来世界での街と自分自身を想定してもらった。また住む街については, 回答者が未来を想定した時, 回答者自身がどのような生き方・活動をしたか, 生きていく中でどのようなライフスタイルを送れたら人生が豊かになるかを具体的に記述してもらった。

c) 思い出・理想調査の設問

ここでは, 「過去の思い出」, 「過去の理想」, 「未来の理想」, 「未来の思い出」をこの順で回答してもらった。設定は3.(1)節に示す通りである。「過去の思い出」では, 生まれてから現在までの思い出の内, 特に印象深いものを1つずつ表-2に示す4つのテーマごとに回答してもらった。思い出について, 思い出が起こった場所, 思い出に関わる人物, 思い出に対する当時の感情, 現在の感情を選択回答した後, 思い出の概要(タイトル)と内容の詳細を記述してもらった。「過去の理想」では, 過去を思い浮かべた際に「こうだったら良かった」と感じることを, これまでの人生で回答者自身が周囲の環境とどのように関わりたかったか, これまでの人生で回答者自身がこのような生き方・活動をしていたらより人生が豊かになっただろうと思える, というような過去における理想(理想的な過去)を考えてもらい, エピソードの個数や分量は自由として表-2に示す4つのテーマごとに記述してもらった。「未来の理想」は②理想調査と同様で, 再度回答してもらった。「未来の思い出」では, 回答者が未来で新たに思い出を作るとしたらどのような思

い出か、数年から数十年後の未来世界での街と自分自身を想定した時、未来の時点でいい記憶だと思える出来事、自分の人生に幸せを与えると思われる未来での経験というような思い出としたい未来を考えてもらい、エピソードの個数や分量は自由として表-2に示す4つのテーマごとに回答してもらった。

(4) ワークショップ (WS)

WSは、参加者自らが積極的な意見交換や協同体験を通じて実践的な知識・技術を学び取る場を意味し、まちづくりなどのコミュニティ活動における問題解決や合意形成の場として活用されることも多い。しかし本研究のWSは「未来の都市について考える場」のこととし、合意形成を最終目標とはしない。検証でのWSは、回答済みの調査票を持参し4人の被験者とファシリテータ1人で行った。主に③思い出・理想調査の内容について発表と議論を行う。「未来の理想」については②理想調査の内容も含めて発表してもらう。全ての発表と議論が終了した後、最後に「未来の都市・街に必要なもの」というテーマで、それまでの発表内容や議論の内容をもとに成果物を模造紙に作成してもらいWS全体のまとめとした。実施時間は5時間から5時間半程度とした。

(5) WS後アンケート

将来の都市に対する考え方が、本研究の調査手法によって変化したかを調べるため、WSの直後にアンケートを行った。このアンケートでは都市や自分自身の暮らし方の将来についての考え方の変化、将来の都市や自分自身に必要なもの、都市や自分自身の将来を考える際の過去の思い出の影響度、有効な調査手法についての問いを設定した。

4. 思い出・理想調査の実施と結果

(1) 調査の実施概要

調査実施概要を表-3に示す。被験者は大学生と30代から50代の方、計16名である。WSの構成は大学生4人グループを2つ、30代から50代4人グループを2つとした。調査依頼は、筆者らと身近な人物を介して依頼した。実施した様子を図-3に示す。

(2) WS後アンケート調査の結果

WS後アンケートの結果を図-4から図-7に示す。図-4より、16人中15人が、将来の都市を考える際、過去の思い出が影響すると考えていた。「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」と回答した人にはそう選択した理由を自由記述にて回答してもらったところ、過去に良い

表-3 調査実施概要

	大学生①	大学生②	30-50代①	30-50代②
対象	I大2年生	I大3年生	40~50代 I大学生 協働 務者と関係 者	30~40代 I大図書館勤 務者と関係者
調査票配布日	2018年 11月5日,6日	2018年 11月6日	2018年 11月22日,27日	2018年 11月29日
WS	2018年 11月25日 5時間程度	2018年 12月12日 5時間程度	2018年 12月8日 5時間程度	2018年 12月9日 5時間程度



図-3 実験実施の様子

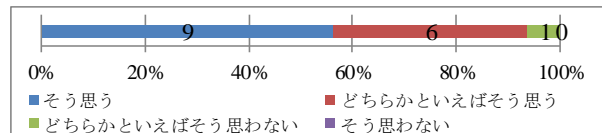


図-4 「未来を考える際に過去の思い出は影響するか」に対する回答

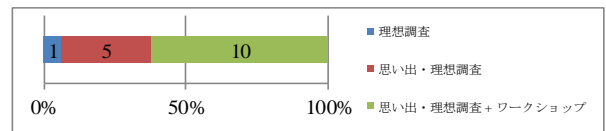


図-5 実験の中で有効な手法

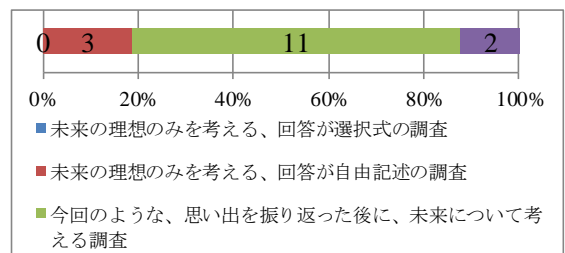


図-6 将来の都市ニーズを見出す際に有効な手法

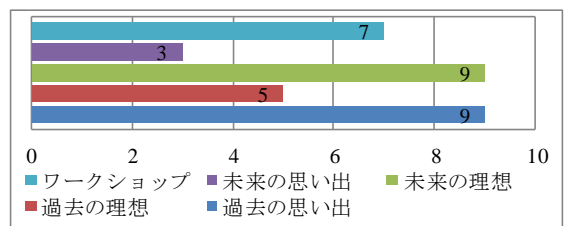


図-7 思い出振り返り後に、未来について考える調査の中で必要だと思う内容

印象がある人はその過去と似た状況を理想に取り入れようとする傾向があり、過去に悪い印象がある人はその過去を改善するような理想を考える傾向があった。これより将来の都市について考える際、過去の思い出の内容が影響すると被験者が感じていることがわかる。また今回の実験で行った手法の中で被験者が将来の都市をより具体的に考えやすいと思う手法を単一回答してもらったところ、調査票記入とWSを合わせた手法が有用だと感じていることもわかる(図-5)。将来の都市・街の理想や要望を見出すための有効な手法を回答してもらったところ(図-6)、選択式よりも記述式の調査を行うことや、記述式の中でも未来の理想のみを調査するより思い出を振り返った後に未来を考える調査を行うことが有効であると感じていることがわかる。さらに「今回のような思い出を振り返った後に未来について考える調査」と回答した人には必要だと思う内容を、過去の思い出、過去の理想、未来の理想、未来の思い出、ワークショップの中から複数回答可で回答してもらったところ(図-7)、少なくとも過去の思い出、未来の理想、WSについては有用な調査手法であると感じていることがわかった。

(3) 理想調査からWSまでの個人意見の変遷

前節で示したWS後アンケートの結果より、実験参加者自身も将来の都市を考える際には、過去の出来事を踏まえた方が具体的にイメージできることがわかった。この結果を踏まえて、本章では『過去の思い出』、『過去の理想』、『未来の理想』、『未来の思い出』の4つのプロセスを経る手法の有用性を示す事象を調査票とワークショップの内容から抽出する。このため被験者が②理想調査、③思い出・理想調査、④WSを経る中で、内容が変化した回答や特徴的な内容に着目して分析を行う。以降では変遷の事例として、グループ内でみられた意見の変遷の中で特徴的だったものを抜粋して図-8に示す。左側の表は意見の変遷に関わる記述や発言の要約を調査手法別にまとめたもの、右側のコメントは記述された内容や発言された意見がどのように変遷したか、その変遷により抽出される新たな要素は何かを説明したものである。以下に具体例で例示する。

- ① 大学生1グループの被験者Oは、理想調査にて「家電が発達して自分の時間が増え、その時間で運動不足を解消することができる」と記載し、思い出・理想調査にて「通販の配達にドローンが使われるようになり、生鮮食品も買えるようになることで、食材を家に居ながら揃えることができ、毎食楽しんで自炊できるようになる」と記載し、技術発展により増加する自分の時間で行うことに関して内容がより具体的になっている(図-8)。
- ② 30~50代1グループの被験者Eは、理想調査にて「80歳を過ぎてもパワースーツを装着して働いている」

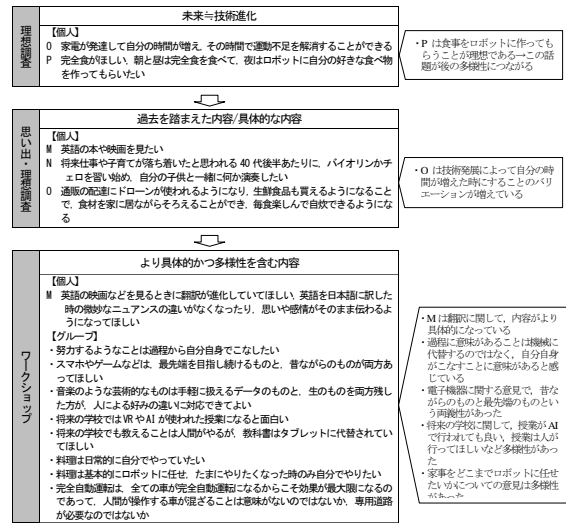


図-8 大学生グループ1の個人意見の変遷

と記載し、思い出・理想調査にて「パワースーツを装着して働くことはやめて、自宅でのんびり野菜、草花を育てたい、草刈りロボットがほしい」と記載し、理想調査では技術的な未来を書いていたが、思い出・理想調査では人間味ある未来を書いている。

③ 同様の分析を4つ全てのグループで行い、まとめて意見の変遷に関わる記述や発言の要約を調査手法別にまとめた。全体の傾向として、「理想調査」では進化した技術がある未来が想定されることが多かったが、「思い出・理想調査」では過去を踏まえ技術にとらわれすぎない内容が抽出された。これらの内容がWSにより議論されることで掘り下げられ、より具体的になり多様性や両義性が抽出された。このような実験結果の分析から、開発した手法は具体的な都市の理想を描出でき、両義性を含んだ内容や人間の周辺環境と関係性を含んだ内容が増えること、また理想に対する意見が変化することが示された。

(4) 調査票内容とWS発言内容の比較

調査票に記入された内容とWSでの発言を比較して、抽出される要素の違いを分析した結果、大きな差異が認められるのは具体さと内容量の2点であった。

具体さに関しては、調査票記入段階では抽象的な内容しかかかっていなかったり空欄があったりしても、WSでファシリテータから質問を受けたり、他の参加者の発表を聞いたりすることで、より具体的な内容を発現したり、新たなエピソードを話せるようになっていたりするという結果を得られた。今回の実験では、WSの発言の際、最後まで一貫して調査票をただ読み上げるだけの人は一人もおらず、いずれかのテーマで全員が情報を追加して発現する場面があった。また調査票記入段階で空欄があった3人中2人が、WSでは空欄箇所についてのエピソードを

表-4 手法別 ニーズの多様性対応表

個人での調査票回答	ワークショップでの発表・議論	ワークショップでの成果物
△	◎	×
記述の内容は個人差が大きい	話すことで様々なニーズが見受けられる	一言（書ける言葉）にまとめるとニーズに多様性は見えないが、ワークショップの円滑な進行には必要

表-5 手法別 ニーズの多様性対応表

	従来型の市民ニーズ調査	思い出・理想調査
対象者	不特定多数	ワークショップ 1 グループあたり、ファシリテータ 1 名、対象者 4-6 名程度
時間	質問内容・項目数に依存するが、比較的短時間	調査票は個人差があるが、4 時間半程度 ワークショップは 1 グループあたり 5 時間程度
メリット	<ul style="list-style-type: none"> ◆対象者 ・選択式のアンケートはわかりやすいため、回答に抵抗がない ・自宅で全て回答することができる ◆主催者 ・サンプル数を多く取得でき、統計的に処理することができる ・比較的短期間で調査を終えることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ◆対象者 ・今まで言葉にできなかったニーズを文章、もしくは言葉でアウトプットすることができる ・他者の意見を聞くことで触発され、新たなニーズが生まれる ◆主催者 ・詳しい情報が聞ける ・言葉だけでは読み取れないニーズをくみ取ることができる
デメリット	<ul style="list-style-type: none"> ◆対象者 ・うまく言葉にできないニーズは伝えることができない ・意見を数多く持つ対象者の場合、全部を伝えられない可能性がある ◆主催者 ・選択式のアンケートの場合、質問に対する回答や点数による回答しか得ることができない 	<ul style="list-style-type: none"> ◆対象者 ・調査票回答とワークショップの負担が大きい ・ワークショップ時、その時の雰囲気によっては自己開示に抵抗を感じる場合がある ◆主催者 ・対象者の都合を合わせる事が難しい ・ワークショップは、ある程度ファシリテートに慣れている人が主催する必要がある

発現できていた。

内容量に関しては、WSにより具体さが増えることで、それに合わせて内容量も増えた。加えて他の発表者の発表内容に対して発言による自己開示をしたり、自分の意見を発表したりすることによっても内容の量は増加した。今回の実験では、例えば「家事はロボットに任せたい」とだけ記入していた人が、WSでは「家事は全てロボットに任せたいのではなく部分的には自分でやりたいものもある」と発言したことで調査票の内容よりも具体的になったり、あるエピソードに対して似たような経験を共有することで内容量が増加したりする場面があった。

いずれの要素に関しても、WSでの発言の方が多く、潜在都市ニーズを抽出するためにWSは意味のある手法の一つと言える。

(5) WSの発言内容と成果物内容の比較分析

WSでの発言とWSでの成果物を比較して、抽出される要素の違いを分析した。大きく違いがあるのは内容量と結論の2点である。内容量に関しては、成果物作成段階でまとめるという作業を行っているため、少なくなる。結論に関しては、文章として書きやすい内容、一般的な内容にたどり着く傾向がある。今回の検証では、「人間性」というような一般的には見られない結論に落ち着くグループもあったが、それは1グループのみだった。これらの結果を踏まえると、成果物作成段階で省略される

内容があり、その省略された意見に潜在性があると考えられる。そのため、完成された成果物から読み取れるニーズだけでなく、過程で読み取れるニーズも重要である可能性が高い。

(6) 理想調査と思い出・理想調査の結果比較分析

従来型の手法に該当するものとして調査に利用した理想調査の結果と、新たな手法として調査に利用した思い出・理想調査の結果を比較し、抽出される要素の違いを分析した。大きく違いがあるのは①両義性、②人間や周辺環境との関わり方、③意見の転換の3点である。

① 両義性に関しては、思い出・理想調査で多くみられる内容である。これは、例えば、デジタルな要素とアナログな要素、仮想体験と実体験というような、一見対極にあると思われる要素がどちらも理想の中で必要な要素として挙げられることで示される。理想調査では未来の理想のみを考えてもらうので、最先端の技術のみが理想的な要素として取り上げられることが多く、両義性がある内容は少なかった。思い出・理想調査では、過去を考えてもらった後に未来を考えてもらうので、「未来の理想」や「未来の思い出」で、過去の時間軸で存在していた要素と未来の時間軸でしか存在し得ない要素を組み合わせられた内容が見られた。

② 人間や周辺環境との関わり方に関しては、思い出・理想調査の「未来の思い出」部分で多くみられる内容で

ある。「未来の理想」では、回答者自身と周辺環境の関わり方に触れる内容が多くみられた。

③ 意見の転換に関しては、理想調査と思い出・理想調査の「未来の理想」を比較した際、内容が1か所以上変わるが16人中10人であった。よって、「未来の理想」のみを考えてもらう場合と、過去を踏まえた上で「未来の理想」を考えてもらう場合とでは抽出されるニーズに違いがあると言える。

これらの結果を踏まえると、回答者自身と都市の関わり方だけではなく、「未来の思い出」から抽出される、他者と都市の関わり方についても十分ニーズになり得ること、過去を踏まえた上で「未来の理想」を考えてもらうことで新たなニーズを抽出できることが分かった。

「過去の思い出」, 「過去の理想」, 「未来の理想」, 「未来の思い出」という4つのプロセスを調査手法に含めることが有用であると言えるが、「過去の理想」については、実験結果から潜在的なニーズがそれほど抽出されなかったので、回答者の負担を考慮すると省略しても問題ないと思われる。

(7) 調査手法の全体考察

これまでの分析結果を整理すると、図-5に示したように、書く、話すというような意見の表現方法の違いにより、抽出される内容の性質が異なるので、調査票記入とWSはニーズ調査手法として両方必要である。また、この性質の違いや意見の変遷を被験者自身も感じたことが、WS後アンケートの結果につながったものと思われる。

WSの成果物は、内容にニーズの多様性は見られなかったが、WSを円滑に進行させるための位置づけとして行う意味があると考えられる。また、調査票記入段階で具体的に書けない人や、WSでうまく話せない人に対しても、ファシリテータが質問することで、内容は掘り下げることができる。よって、WSを開催する際、ファシリテータの存在も重要であると言える。ニーズの多様性について、手法別の対応表を表-4に示す。

そして、両義性、人間や周辺環境との関わり方といった、従来型の手法では抽出されない要素があった。このような要素は、本来ニーズとして切り捨てられてはいけない要素である。また、全員がこのような要素を自分の意見として持つことが重要なのではなく、ある1人の意見がWSにより共有されること、表面化することが重要である。

以上より、従来型の手法では重要度が低いと評価される要素や、両義性、人間や周辺環境との関わり方といった新たに抽出される要素があることから、思い出や理想を活用した手法は有用であると考えられる。

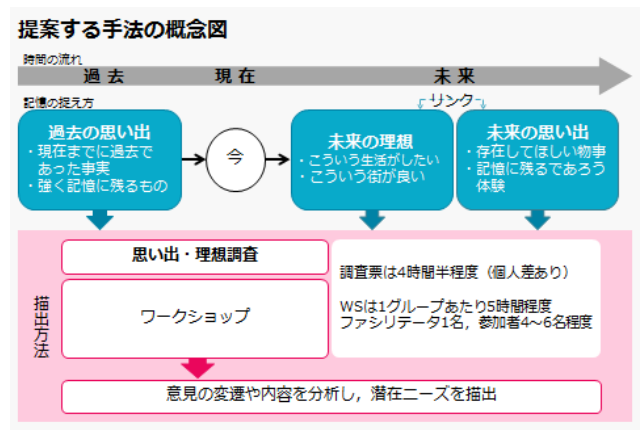


図-9 提案する手法の概念図

5. 潜在都市ニーズ描出手法としての「思い出・理想調査」の有用性と提案

(1) 従来型の調査手法と「思い出・理想調査」の比較

検証により得られた知見と、分析により得られた知見を踏まえて、潜在都市ニーズの描出手法を提案する。従来型のニーズ調査と、新たな手法の特徴を整理し、比較したものを表-5に示す。

(2) 潜在都市ニーズ描出手法の提案

これまでの知見を踏まえ、潜在都市ニーズを描出するための手法として、①属性調査、②思い出・理想調査、③WSから構成される調査手法を提案する。②思い出・理想調査について、今回の検証結果より、「過去の理想」に関しては有用性に結びつく項目がほとんど抽出されなかったため、回答者の負担を考慮し、「過去の思い出」, 「未来の理想」, 「未来の思い出」の3つのプロセスを経る調査を提案する。手法の概念図を図-9に示す。

(3) 期待される潜在都市ニーズ

提案した調査手法を活用した際、導出が期待される潜在都市ニーズとして、「多様な内容」, 「両義性」, 「人間や周辺環境との関わり方」が挙げられる。これらの要素は従来型の手法では抽出されないニーズであり、かつ、本来は重要度が高い可能性があり、計画情報として排除すべきでない要素である。

潜在都市ニーズを抽出する過程で、参加者は個人レベルのニーズに気づき、それを他者と共有したり議論したりすることで新たなニーズに発展させることができる。

6. 結論

本研究では、潜在都市ニーズを描出する手法として

「思い出・理想調査」を開発し、従来型のニーズ調査の結果との比較分析を行うことにより有効性を検証した。得られた知見を以下に示す。

- ① 「思い出」と「理想」を活用し、「過去の思い出」, 「過去の理想」を経て「未来の理想」や「未来の思い出」について調査票に記入してもらった後にWSを行う潜在都市ニーズ調査手法を開発した。
- ② 将来の都市を考える際, 「過去の思い出」, 「過去の理想」を経て「未来の理想」や「未来の思い出」を考えてもらうというプロセスが重要であると実験参加者自身も感じており, 調査から得られた意見の変遷からも有用性を示した。
- ③ 開発した手法を検証し分析した結果, 未来の理想のみを考える際は, 第一に進化した技術がある未来が想定されたが, 検証した手法を踏まえると, 過去を踏まえながら技術にとらわれすぎない未来が想定されるようになった。またWSにより議論されることで内容が深められ, 多様性や両義性が抽出された。このような意見の変遷が今回検証した手法の特徴であった。この変遷の中に具体的かつ多様性を含む要素が潜在ニーズとして抽出された。これらが従来型の手法では見られず, かつ計画情報として排除できない重要な要素である可能性を示した。

【参考文献】

- 1) 松橋啓介：「大規模市民参加型まちづくりワークショップの事例報告—西オーストラリア州パース都市圏におけるフォーラム「都市との対話」の取り組み—」日本都市計画学会都市計画論文集, No.39-3, pp. 331-336, 2004.
- 2) 福田有希ほか：「バス路線網再編後の利用意向の把握を目的とした調査手法の比較分析とデプス・インタビュー調査の有用性—水戸市のバス路線網再編計画に対する調査事例—」都市計画論文集Vol. 51 No. 3, pp. 1241-1248, 2016.
- 3) 田中晃代ほか：「ニュータウンにおける持続可能なまちづくりの指標づくりの意義と方向性に関する研究—千里ニュータウンを事例として—」日本都市計画学会都市計画論文集, No. 39-3, pp. 577-582, 2004.
- 4) 榎本碧ほか：「ビジョン型プランニングによる市民主体形成に関する研究—塩田津川と町並み夢ぷらんフォーラムを事例として—」土木計画学研究・講演集, Vol. 57, CD-ROM, 2018.
- 5) 岡村竹史, 後藤春彦「住民参加型ワークショップによる総合的・体系的計画づくりへの試み—「まちづくり人生ゲーム」の提案と検証—」日本建築学会学術講演梗概集, pp. 11-12, 1996.
- 6) 仙田満「原風景による遊び空間の特性に関する研究—大人の記憶している遊び空間の調査研究—」日本建築学会計画系論文集第322号, pp. 108-117, 1982.
- 7) 金利昭, 小沼志乃武「世代別にみた日常生活における移動の意味に関する基礎的研究」第31回日本都市計画学会学術論文集, pp. 409-414, 1996.
- 8) 金利昭, 久保田明子「人間の生涯発達に着目した生活環境の新しい計画枠組みの提案—思い出分析を用いた意味的論アプローチ—」土木学会環境システム研究論文集, Vol. 29, pp. 131-142, 2001.
- 9) 石川ほか：「思い出分析と理想分析を統合した都市像と生活者像の描出手法の開発」土木計画学研究・講演集, Vol. 57, 56-03, 2018.

RESEARCH ON CLARIFICATION OF PERSONAL IDEAL CITY IMAGE USING PERSONAL MEMORIES AND IDEALS

Rei SATO, Toshiaki KIN